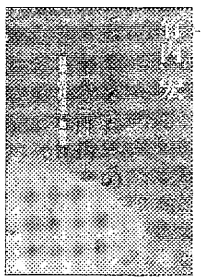
エコノミストたちの栄光と挫折

路地裏の経済学　最終章

竹内　宏［著］

東洋経済新報社［刊］　本体2000円（税別）



学ぶべき二枚腰の向日性

評・東谷暁（ジャーナリスト）

八〇年代半ばだったと思う、ある研究会にゲストで招待された「現場につよいエコノミスト」が、紹介に続いて、お経のような独特の節回しで話し始めた。

「えー、三十歳代までは議論をしなさい、四十歳代になったら議論を聞いてあげなさい、五十歳代になったら議論に負けてあげなさいといわれるわけであります。これが日本のサラリーマン社会というわけでありまして……」

こう語っていたエコノミストが、竹内宏氏だった。会場にいる参加者たちはすでにこの竹内節に馴染んでいるらしく、笑みを浮かべながら、野太い声のお経に聞き入っている。それまで心に描いていたエコノミスト像と、あまりにもかけ離れているので、三十歳代になったばかりの私はどぎまぎしながら、竹内氏の日本サラリーマン社会論を聞いていた。

本書は、五十年以上、エコノミストとして活躍してきた竹内氏が、内側から見たエコノミストたちの戦後史である。戦後の経済安定本部に参集した経済学のエリートたちに始まり、長銀や興銀が日本経済の発展を支えた高度成長期を経て、八〇年代に繁栄の絶頂期に至る。しかし、八〇年代後半にバブル経済と化し、九〇年代のパートには「下り坂で頑張る」というタイトルがついている。

やはり面白いのは、並み居るエコノミストに伍して、ユニークなエコノミストとして開花する竹内氏自身の自伝的部分だろう。たとえば、東大を出て長銀に入行した竹内氏は、花形部署である融資部門に配属され、名だたる大企業を十社も担当することになった。「しかし、私は元気な時間を銀行の仕事に取られるのは損だと思い、銀行から下宿に帰るとすぐに寝て、朝三時頃起きて、マルクスの『資本論』や『ドイチェ・イデオロギー』などを読み、くたびれた頃出勤した」。

驚くのは、長銀に勤務して大企業を回りながらマルクス経済学を勉強していることだ。当時でもかなり異質だったのではないだろうか。竹内氏は、同世代のエコノミストは「宗旨替え」が激しかったと指摘して、自分の場合は、「二〇歳代にはマルクス主義に夢中になり、四〇歳頃にケインズ派に変わった。五〇歳代からは供給派になり、現在は制度改革派」だと、さらりと述べている。

マルクスを読んでいた若き日の竹内氏は、あるとき長く会社を休んでしまい、様子を見に来た課長に、下宿のおばさんが「映画に行っていると本当のことをしゃべってしまった」。竹内氏は月給を百円さげられ、二年後に「調査部に追いやられた」。しかし、竹内氏は書いている。「不幸が幸せを呼んだ。念願の調査部に移り、それ以後、四〇年間も調査部門にいることになった」。こうした、楽観主義のように見えて、どこかシニックなところのある陰影が、竹内氏が書くことになる経済論にもよく表れていた。

興味深く思ったのは、八五年、長銀調査部の小沢雅子氏が『新「階層消費」の時代』（日本経済新聞社）を書いた前後の出来事だ。この本は、最近の格差論に見られた多くの論点を提示しているので、私は何度も取り上げてきたが、不当に忘れられた先駆的業績といえる。ところが、竹内氏の本書を読むと、右翼が小沢氏の著作の基になった調査月報に文句をつけて、長銀をゆすってきたという。

「小沢は若かったので、右翼なんか恐れることはないと突っぱねようとしたが、長銀の総務部にしてみると、右翼に店頭で暴れられたならば、銀行の信用が失墜すると考え、金銭で解決した」

この小沢氏をめぐるエピソードには、後日談がある。当時、東京工業大学にいた香西泰氏が、小沢氏と竹内氏が論争する討論会を企画した。「私は『日本は平等社会だ』と主張し、彼女は『上司の誤りを指摘するのは本意ではないが』といった前置きをつけて、『日本は階層社会だ』と反論し、私が論争に敗れた」。当時、竹内氏は五十歳代だったが、それだから負けてあげたわけではあるまい。このあたり、なかなか爽やかである。

実は、この話にはもうひとつオマケがある。この前後、小沢氏以外にも何人か女性エコノミストが長銀調査部で活躍していた。そのひとりが小林由美氏だった。小林氏は、アメリカでベンチャーキャピタルを起して成功するが、二〇〇六年、『超・格差社会アメリカの真実』（日経BP社）を書いて、日本の格差論争にも一石を投じた。竹内氏は上司として、格差論の代表的著作を書いた女性エコノミストを、二人も育てたことになる。

この時代の直後から、本書にはしだいに息苦しい空気が流れ始める。八九年、長銀は長銀経営研究所を長銀総合研究所と改称し、同年、竹内氏は理事長に就任している。九一年になると、長銀は調査部を同研究所に吸収させてしまうが、前年、若手の臼杵政治氏が「資産価格の下落と金融機関」という社内レポートで「不良資産が急増して、まもなく、銀行は経営危機に陥る」と警告していた。しかし、レポートは経営に生かされなかった。やがて長銀は破綻し、竹内氏の月給も十万円になる。

このエコノミストたちの戦後史を、いま読む意義があるとすれば何だろうか。この原稿を書いている傍らで、テレビはアメリカの投資銀行リーマン・ブラザーズの破綻を伝えている。エコノミストは、再び本領を発揮すべき時代を迎えていることになるのかもしれない。

竹内氏は「エコノミストの活躍は、敗戦直後の安本（あんぽん）時代と同じように広がる可能性が大きい。エコノミストにとって、働き甲斐がある幸せな時代がやってきた」と締めくくっている。これはいまのエコノミストたちの生態を考えると簡単には肯定しかねる。とはいえ、いまこそわれわれが学ぶべきは、この竹内氏がもつ二枚腰の向日性なのかもしれない。